

勇者パーティーから
追い出されたと思ったら、
ドゲザ
土下座泣きながら
で謝ってきた!
2

蒼衣 翼

AOI TSUBASA

Ⅲ. 新堂アラタ

Main Characters

フォルテ

ドラゴンの盟約の化身。
鳥の姿をしているが、
多くの不思議な力を持つ。



デアクリフ・ザクト

平民上りの貴族で
著名な学者。
「大森林の迷宮化」の
調査団に加わる。

アルフレッド

(勇者)

文武両道の天才だが
性格に難あり。
伝説の初代勇者にそっくり。

ミュリア

(聖女)

表情に乏しい
引っ込み思案な少女。
勇者を兄のように慕う。

メルリル

獣の耳と尻尾を持つ森人の娘。
リリル村^{メルリル}の巫女で
精霊^{メイス}の力を操る。

ダスター

本編の主人公。
アラサーのベテラン冒険者。
「辻褃合わせのダスター」と
呼ばれる。

年季の入った冒険者である俺、ダスターは国からの依頼を受け、勇者パーティのサポート役に就いていた。しかし突然首を言い渡され、理不尽にも追放されてしまう。

ところが数週間もしないうちに、パーティの一人が俺の前に現れ、なんと土下座をかましてきた。勇者アルフたちが死の淵をさまよっているのを、助けてほしいと。

結果的に彼らの命を救った俺は、一転「師匠」として懐かれることになってしまった――。

そして今、俺は困惑していた。この場には微妙な空気が流れている。

長い間封じられていた火喰いの獣が蘇り、自分たちの集落が滅びるかもしれないという危機的状況に、森人のメルリルは勇者たちに助けを求めた。

彼女の必死の思いは実を結び、熱の山にて、無事に魔物の再封印は成功した。

そこまでは良かった。ところが、封印から戻って来て早々、メルリルは自分のいない間に黒茨の実を食べてしまった勇者たちの姿を見て、すっかりむくれてしまったのである。

そして美人のすねた姿にほだされた俺は、彼女のために再び黒茨の実を採って来たという訳だ。おかげで、なんとなくしまらない喜びの再会となっていました。

「——だって、私、黒藪の実が大好きなんです」

俺から黒茨の実を受け取ったメルリルも、さすがに微妙な空気を感じたのだろう。恥ずかしそうに言い訳をした。

「森人は黒藪の実と呼んでるのか」

「平野の人はなんと？」

「黒茨の実と呼んでいる」

俺の言葉に、メルリルは猛然と抗議した。

「黒藪は、確かにトゲがありますけど、茨とは種類が違うんですよ！」

どうやら森人的に、何か譲れない部分だったらしい。

「す、すまん。俺たちはけっこう、適当に名前を付けてしまうからな」

俺は以前学者先生にも怒られたことを思い出しながらメルリルに謝った。

「あっ！ ふふっ、ごめんなさい」

俺はよほど困ったような顔をしていたのだろう。

メルリルはちよつと笑い混じりに謝る。だが、すぐに今度は突然泣き出した。

「ど、どうした！」

「だって、頼んだことはもう終わって、だから、みんな帰っちゃったと思っていたから、……私、ほっとして」

涙ぐみながらそう言うメルリル相手に、どうしたらいいか困っていると、背中を誰かがつつく。

振り向いたら勇者がいい顔をしながら抱きしめる動作をやってみせた。

お前また殴られたいのか？

「俺にとつては、今回の件は仕事じゃないからな。ええつと、メルリル、おかえり。無事でなにより」

「……ただいま帰りました。ありがとうございます」

メルリルが涙を拭いて少し微笑んだ。

ううむ、何度見ても綺麗な人だな。

それから勇者、ため息を吐いて肩を竦めるな、全部見えているからな！

「そう言えば、この辺りに黒藪の群生地があつたんですね。森がだいぶ燃えて、様子が変わってしまっていたから全然気づきませんでした。森人失格です」

「いやいや、こんな風に燃えてしまったらそりゃあ気づかないだら」

「でも、気づいてしまうダスターさんは凄いですね。森人の狩人としてもやっていけるのでは？」

それはメルリルにとつて最大限の褒め言葉だったのだろう。

山から戻ってから、どこか情緒不安定気味のメルリルだったが、少しだけ落ち着いたようだった。「森人の暮らしもいいが、俺は、同じ場所に留まり続けることは、やっぱり出来ないかな。一つところに長くいると、別の新しいものが見たくてたまらなくなる。典型的な平野人だからな」

俺の言葉にメルリルはフフフと笑った。その笑顔は先程のものと違って、どこか寂しげだ。
「それで、封印は終わったのか？」

俺たちに任せていては話が進まないと思ったのか、勇者がメルリルに尋ねる。

「ええ、無事に火喰いの獣を山のなかに封印しました。と言っても、封印されたのは山のほうで、火喰いの獣にとっては慣れた家に戻れたというだけの話なんでしょうけど」

「俺は師匠ほどの放浪人の衝動はないが、それでも山のなかに千年も居続けたら別のところへ移りたいと思うだろうなと思う。だがまあ、あの鈍さだ。あいつは引き籠もっているほうが向いているのかもしれない」

珍しく勇者が饒舌だ。戦ったことで、火喰いの獣に対し、何か思うことがあったのかもしれない。というか、戦いの序盤は見ていたが、そんなに鈍そうでもなかったよな、あの魔物。

「鈍いとは？ けっこう素早い奴だったようだが」

「斬ったり殴ったりしても、そのときは素早く反応するんだが、すぐに痛みも忘れる感じだった。わりとやりにくい相手だったな。纏っているという熱のせいだったのかもしれないが」

「ふーむ。いろんな魔物がいるもんだな」

メルリルの言葉も、山の様子も、封印がちゃんと成功したことを証明している。

だが、それにしてもメルリルの様子はどこか沈んで見えた。

いや、彼女の名誉のために言うが、決して俺たちだけで黒藪の実を楽しんでいたせいではないと

思う。

実際、今も俺が採ってきた黒藪の実を、勇者の仲間たちと分け合って美味しそうに食べているしな。

……それは突然だった。

「同胞の気配を感じて訪れてみたが、どうやら奇妙なことになっているようだな」

ふいに、聞き覚えのない声がしたのだ。

いや、声じゃない。これは！

「……！」

メルリルが悲鳴の形に口を開け、真っ青になって震えている。

聖女ミュリアもほとんど同じ様子だ。

モnkのテスタと剣聖クルスは目を見張って、無言で俺に視線を寄せた。

ん？ あっ！

「馬鹿っ！ やめろ！」

いくらなんでも普通はそんな反応はしないだろ！ お前、危険に対する感覚がどつか壊れてるんじゃないのか？

勇者は突然現れた相手に気づくと同時に抜剣したらしく、すさまじい踏み込みで斬りかかった。青く輝く鱗の巨大なドラゴンに。



当然と言えば当然だが、勇者の攻撃は全く通用しなかった。

鱗が硬くて剣が通らないという段階ですらない。なんと、ドラゴンの体の手前で剣が止まってしまっただ。

なにがどうなっているのかわからないが、勇者がどれほど魔力を高めてもその状況は変えることが出来なかった。

青いドラゴンが、ずっと前脚を持ち上げた。

一瞬肝が冷えたが、そのまま触れるか触れないかという軽い接触で勇者を転がし、勇者が立ち上がって再び斬りかかるとまた転がす。

俺はこれと似たような光景を見たことがある。動物の親が子どもと遊んでいるときの姿だ。

「力の差がありすぎて本気とは思われなかったのか。助かった」

緊張していた体から力を抜いて、どんな状況になってもすぐに動けるように、心と体の状態を平坦にする。

戦って勝てる相手じゃないが、いざとなつて選べる行動は戦いだけじゃないからな。

「メルリルさん！」

聖女の声に振り向けば、メルリルが崩れ落ちるところだった。

「メルリル！」

駆け寄ろうとする俺を制して、モンクが素早くメルリルに近寄ってその首に手を当てる。そして、大丈夫というようにうなずいた。

どうやら気を失っただけらしい。

封印のために、精神的な負担を抱え続けた挙げ句にドラゴンが現れたんだ。ショック死しなかっただけありがたいと思うべきなんだろう。

聖女もだいぶキツそうだが、モンクが傍に寄って、守るようにドラゴンとの間に体を滑り込ませている。

そちらはモンクと剣聖に任せることにして、改めてドラゴンと対峙する。

青いドラゴンなど聞いたことがない。

ドラゴンは四種いて、白、緑、赤、黒の体色をしている。色ごとに性質が違い、白と緑は穏やかな気質で、赤と黒は攻撃的だ。

青色のドラゴンは記録にない。

これは一つの恐ろしい事実を示唆している。

このドラゴンは、下手をすると変異種なのではないか。

魔物の変異種は短命な種ほど生まれやすい。逆に言えば、長命な魔物の変異しにくいということ

になる。

あらゆる魔物のなかで、ドラゴンは最も長命だと言われている。百年とも千年ともはつきりしないのは、調べようがないからだ。

つまり変異種が最も生まれにくい魔物と言えるだろう。ただでさえ人間など羽虫程にも脅威に感じないドラゴンに変異種が生まれたら、とんでもないことだ。

いや、通常種だろうが変異種だろうが、どちらも人間が敵わないという意味ではそう違いはないか。

「人間は知性がある生き物ということだが、私の言葉に応じることが出来るか否や？」

またも頭に響く声。

恐ろしくはつきりと意味がわかる。うっかりしていると、普通に言葉で話しかけられたのかと勘違いしてしまうレベルだ。以前出会った白いドラゴンは、意識の塊をぶつけられているような感じで、意味として受け取るのにある程度の努力が必要だった。

なによりも恐ろしいのが、この青いドラゴンには全く威圧感がないことだ。

近づいて来たときも気配すらなかった。

力が無い訳ではない。その証拠に勇者の剣は触れることすら出来ない。

つまり、外に自分の力を放射しないように完全にコントロールしているのだ。もはや強さの予想さえ出来ない。

「何か聞きたいこともあるのでしょうか？ 先程は同胞の気配を追って来られたというようなことを言われていましたが」

俺はゆっくりと、言葉を意識しながら紡ぐ。

「おお、やはり会話が可能なのか。小さいのになかなか優秀な生き物だな」

感心されている。つまりこのドラゴンは人間と出会うのは俺たちが初めてということだ。

あまりの責任の重大さに、一瞬気が遠くなるが、歯を食いしばって耐える。下手をすると俺たちの対応一つで今後の人間との関係性が決まってしまうのだ。

「うむ、実に好ましい女性の香りがしたもので、それを追って来たのだが、香りの元は、このじゃれている小さいのと、その特別小さいのからであった。理由はわかるか？」

そうか、勇者はじゃれていると思われるのか。さすがは神に選ばれし者、強運だな。

その強運の勇者は、どうやらすっかり疲れ果てたらしく、ふてくされたように座り込んで、俺とドラゴンの会話を聞いていた。

「少し前に、その二人は病の治療のために、ドラゴンの魔力を借りました。その魔力が体内に残っているのだと思います」

「ほう、して、その相手はどのような女性であった？」

「はい。真つ白な姿で膨大な魔力を持っていました。好奇心が旺盛で、気前のいい方です。食事の内容を決めかねていたようで、彼らが食べた魔物を伝えたところ、たいそうお喜びになって、果物

をいただきました」

「おお、興味が出来たぞ。どうも我の近くにいる同胞は、がさつで頭の悪いやつばかりでつまらなかつたところだ。……ふむ」

青いドラゴンはいさし考えるように俺をしげしげと眺めた。

「そなた、我と盟約を結ぼうではないか」

「えっ！」

素で声を上げてしまい、慌てて、気持ちを抑える。

「どういうことでしょうか？」

「実はな、我らにはいくつか種族に課せられた盟約があるのよ。その一つが互いの同意なく、他所の家を訪れないというものだな。通常は同胞同士の間を通してお互いを紹介の上、同意を取って訪問するもののだが、今回はそなたたち小さき者の紹介という予想外のこと、相手の同意が取れない」

「なるほど」

正直、ドラゴン種族の盟約なぞ知りたくないぞ。

「そこで変則的ながら、そなたと盟約を結び、伝言を相手に伝えてもらうという方法を取ることにしたので」

「えっ！」

またも叫んでしまった。

いや、だって、伝言を相手に伝えるって、まさか竜の営巣地えいそうちに行けということだろうか？

いくらなんでも人間に可能なこととは思えない。というか「した」？

「やはり新しいことをするというのは楽しいものだな」

ワクワクしたような青いドラゴンの声。

いやいや、俺は全く楽しくないから。というか、なんで俺なんだ？

「待っていただきたい。あなたは二人から仲間の気配がするからと接触して来られたはず。それなのになぜ俺なのですか？」

「簡単なことだ。他の小さき者たちからはすでに別の盟約の気配がする。盟約は重ねると重い負担となるからな。我としては無事に伝言を伝えたいのだ」

なるほど、始まりの盟約か。勇者たちは全員神の祝福を受けている。そのことだろう。

メルリルは精霊メイリスのせいかな？ それ以前に意識がないから除外されたか。

魔法については深く学んだことが無いから、盟約がどういものかいまいちピンと来ないな。

そこへ勇者が凄まじい勢いで走って来た。

「師匠、この話受けたほうがいい」

恐ろしく真剣な顔でそう囁く。

なるほど、お前は魔法の専門家だからその意味がわかるんだな。

だがお前は勘違いしているぞ。

この話、もはや受ける受けないの段階ではない。すでにその先に勝手に進んでいるようだぞ。だがまあ情報は大事だ。聞いておこう。

「死ぬかも知れない危険を犯す価値があるぞ？」

勇者は深くうなずいた。

「かつて個人でドラゴンの盟約を受けたのはただ一人。初代勇者のみだ」

……ん？ 説明はそれで終わり？

俺は初代勇者については教会で語られる逸話ぐらしか知らないぞ。

魔物を倒して人びとを救った話と魔王を下して国を拓いた話だ。

ドラゴンに力を借りたという話はあったような気はするが、盟約については知らん。

まあいいか。うだうだ考えてもどうせ断れない話っぽいしな。ならば生き残る可能性を高めるために出来るだけ相手から譲歩を引き出すまで。

「青き御方よ、あなたの方にとって我々人間は矮小な存在。相手が俺からの伝言を受け取るとは思えません。どうやって証を立てればいいのかしら」

「それは考えてある。安心して我が盟約を受けるがよい」

青いドラゴンの言葉と共に、俺の眼前に光が生じた。

思わず目をすがめたままの視界のなかで、何かが形を成すのをぼんやりと眺める。



光が収まり、そこに在ったのは、目の前のドラゴンを小さくしたような存在だった。

いや、これはドラゴンというよりも長い尾羽を持つ青い鳥か？

ドラゴンの鱗の一枚一枚が羽毛に姿を変え、青い色が光を反射しているようだ。

「こ、これは？」

「それは我が影^{ミッドラッシュ}。そなたの盟約よ」

「分身ということですか？」

「いや。我が魂の一部を使い、生み出した真正正銘一つの新しき存在よ。祝福と成すか災いと成すかもそなた次第。だがそれが在れば同胞はそなたを攻撃せぬし、伝言もわかるであろう。ふむ、我にとっても新しき試みで心が躍^{わど}るわ」

何か楽しそうだが、つまりこのドラゴンのような鳥がメッセージということか？

いや、何かとんでもないことをさうつと言われたぞ。この青のドラゴン、俺の眼前で生命を創造してみせたのか？ 神と崇^{あが}めている地域があるのも当然だな。

「ではさらば小さきものよ。伝言を頼んだぞ。我が影^{ミッドラッシュ}と共に数奇な生を楽しむがよい」

「えっ、あっ……」

現れたときも唐突だったが、去るときもまた唐突すぎた。まるで今の姿^{まぼし}が幻^{まぼし}でもあったかのように、青いドラゴンはその痕跡^{こんせき}さえ残さずに消え去ってしまった。

小鳥というにはいささかデカイ青い鳥を残して。

「どうするんだ、これ」

「ツイー！ チチチチチ！」

「うわっ！」

盟約の鳥が俺の髪を引っ張りながら何かを催促するかのよう^{よう}に鳴く。

「お師匠さま。名付けの儀式を！ 形を竜が成し、存在をお師匠さまが認めて初めて、その盟約はこの世界に認識されます。お早く！」

聖女が慌てたように駆け寄って来てそう促した。

「俺が名付けをするのか？」

「ピッー」

そうだというように鳥がうなづく。

あのドラゴン、人間の賢さを信頼しすぎだ。ここに聖女さまがいなかったら名付けなんかわからなかったぞ。

いや、それも込みの盟約なのか？

ここには盟約をすでに授かった者がいるから大丈夫だと。

しかし名前か。

青いから青というのは単純すぎるよな。そう言えば、以前遠い場所から流れて来た若い冒険者が言っていたっけ。

青い色のものを身に着けていると幸運が訪れるとか。ふむ、幸運は女性名だからそのままじゃ駄目だな。

「じゃあ、お前の名前はフォルテだ」

そう告げた瞬間、鳥の全身を包む羽毛が光を発した。

元はキラキラとした光を反射した金属的で硬質な色合いだったものが、深くどこまでも続く明るい夜の空のような透明感のある青に。

単なる竜に似た鳥といった感じだったものが、どこか威厳のある知性を感じさせる存在に。

おかしなことに、まるで変化が無かったようにも、驚くほどに変わったようにも見えた。

「我はフォルテ。そなたの盟約であり唯一無二の存在」

「うおっ！　しゃべった！」

驚いた俺が勇者や聖女に助言を求めようと振り向くと、二人はポカンと口を開けて俺とフォルテを見ていたのだった。

「師匠とんでもないぞ。盟約と意思疎通が出来るなんて前例がない」

勇者が酷く真剣な顔で俺に言ってきた。

とは言え、それがどのくらい大変なことなのかということが俺にはピンと来ない。

ただ、国の、いや、この大陸のトップに手が届く勇者が大変と言うのだから、大変なのだろうということとはわかる。

しかし、今ごちゃごちゃ考えたところで、ドラゴンから託された依頼が無くなる訳でもない。現実として受け入れるしかないなら、その存在に慣れるしかない。

それに、今はそれよりも。

「メルリルは大丈夫か？」

俺がそう言って後ろで固まっていた四人に視線を向けたときだった。

俺の肩に止まっていた青い鳥の姿をした竜の盟約フォルテが、おもむろに飛び立ち、そのままついとメルリルの上に舞い降りたのである。

そしてその瞬間、ふわりと青いやわらかな輝きがメルリルを包んだ。

「っ！　おい！」

俺が焦って駆け寄ると、フォルテは再び飛び立ち、俺の頭に降り立った……ようだった。頭に違和感が無いので、存在が感じられない。

長い美しい尾がまるで髪飾りのように肩口に垂れているので、いるのがわかるだけだった。

「あ、……私？」

メルリルの声に、俺はフォルテを意識するのをやめて、声のほうに顔を向けた。

メルリルはきよとした表情だが、先程までのどこか憔悴した様子が消え去っている。

顔色がよく、目に輝きが戻っていた。

「さっきドラゴンがいませんでしたか？　いえ、そんなはずありませんよね」

気を失う前の状況を思い出したのだろう、一瞬青くなつて周囲を見回したが、何もいないことを確認して、自分の記憶を疑つたらしい。

「いや、青いドラゴンならさっきまでいたぞ。俺に盟約を押し付けて行つた」

「ドラゴンの盟約ですか！」

メルリルは目を見張つたが、俺の顔から頭へと視線が移動する。

「……綺麗な鳥」

「この鳥がそのドラゴンの盟約らしい」

「えっ！ えっ？」

意味が呑み込めないのだろう。メルリルは困惑したように、俺の顔と頭上のフォルテとの間で視線をうろろさせた。

そこへ、先程より深刻な顔になった勇者が寄つて来る。

「師匠。その鳥がドラゴンの盟約であることは、ここにいる者たちだけの胸にしまつておいたほうがいい。教会や国の上層部に知られたらとんでもないことになる」

いつの間にか勇者の横にやつて来ていた聖女も、ブンブンと首を縦に振つて同意を示す。

「そこまでの話か？ まあ初代勇者だけの偉業というなら、庶民が受けていいものじゃないとかいろいろとうるさく言われそうではあるが」

「師匠は今、何が起きたか理解していないからそんなに呑気なんだよ。その盟約は、師匠の気持ち

のままに命令もなしに力を振るつたんだぞ」

「今のはやはり魔法の類か」

「魔法として分類するにはきちんと形が整っていません。あえて言うなら力の衝動とでも表現出来るでしょうか」

酷く焦りを感じさせる勇者の言葉と、普段と違って怜悯さを感じさせる聖女の言葉。二人の言動から、この現象がかなり危険を孕んだものであるということがわかる。

「わかつた。詳しい話は後からするとして、しばらくの間俺は強い衝動を感じないようにすればいいんだな」

「さすがお師匠さまは理解が早いです」

「ミュリア。あなたまで師匠呼ばわりは無いんじゃないか？ 俺は全くあなたに何かを教えた覚えはないが」

「勇者さまのお師匠さまは私のお師匠さまです」

「いやいや」

「あの……」

深刻な話をしていたはずが、いつの間にかいつもの問答に移行していた俺たちに、メルリルが声を掛けて提案した。

「一度村においてになりませんか？ お疲れでしょうし、ご馳走も用意出来ると思います。それに

お話し合いなら私の家で行えば、他に漏れる心配ありませんし」

「あ、そうだな。勇者たちもメルリルも疲れているのに、悪かったな」

「いえ、とんでもありません。それに、私はかつてないほどすっきりとした心地です。今なら、何があっても受け止められる、そんな気分なんです」

「俺は疲れてないから大丈夫だぞ」

「私も十分に休ませていただきましたから。でも村の方々は心配されているでしょうから、早く戻って安心させてあげたほうがいいでしょう」

メルリルが微笑み、勇者が胸を張る。

そんななかで、最もまともなことを言ったのは、勇者パーティにおいて常識人として苦勞をしているであろう剣聖であつた。

「えへへ、正直お腹すいちゃった」

「私は、少しだけ喉が渴きました」

モンクと聖女が遠慮がちに弱音を吐いた。

そうだな。今回はけっこう、勇者たちにはキツかったんじゃないかと思う。

半日以上まともなものを食ってないし、水も最小限で分け合つて飲んでいた。

魔物退治にしても、あまり奥地には出向かずに、人の住む場所周辺の安全を確保する活動が中心の勇者たちは、野営をほとんどしない。

むしろ今回、よくぞ弱音を吐かずにメルリルを待つていたと感心するほどだ。勇者パーティとしての自覚が、彼らを支えているのかもしれない。

「じゃあ、メルリルの凱旋がいてんと行こうか。ご馳走もあるみたいだしな！」

場を盛り上げるように、わざと元気よく言ってみる。

「ご馳走！」

「楽しみです！」

途端に元気になった女の子たちを見つめて、メルリルがにこにこ嬉しそうにしていた。

俺はそんなメルリルをそつと見つめて、目をすがめた。

「何があつても受け止められる」か。火喰いの獣を封印した村の英雄だろうに、いったい何があるというのだろう。

そんな俺の顔の横で、青く美しい鳥の尾羽根がゆらゆらと揺れていた。



村へと戻るのに、メルリルが精霊メイスイの道を拓こうとしたので止めた。

封印をほどこし、熱の山を登り下った後だ。いくらなんでも無茶だと判断したのだ。

森はメルリルにとって慣れた場所だ。しかも大蜘蛛おおくもが死んだ今、森に残る脅威は少ないだろう。

腹ペコ組には悪いが、少しぐらい運動して悪いことはない。

「おおっ！ ほわほわ光るキノコがあるぞ！」

「誘い茸だ。触ると指が痺れるぞ」

約一名、元気が有り余っている奴がいるが、まあいつものことか。

メルリルは、ドラゴンを見て気を失った後は、どこかスッキリとしたような表情になり元気そう
うだ。

それが今俺の頭上にいる、ドラゴンの盟約であるフォルテのやったこととは信じがたいところではあるが。

聖女によると、あれは癒やしの力の類だったらしい。

本来の聖女による癒やしの場合は、精密なコントロールが必要なのだそうだが、あれは、フォルテが勝手に判断して、必要な力を使ったものとのことだ。

おそらく俺が強く望めばそれを叶えようとするのでは？ と、推察していたが、もしそうだとすると恐ろしいことだ。理性にコントロールされない力ほど、危険なものはない。

つまりは俺はフォルテとの距離感を掴むまで、気を抜いてはいけないということになる。

村に到着して、火喰いの獣の封印と、ついでに大蜘蛛退治を報告すると、とても喜ばれた。

特に大蜘蛛のほうは、多くの犠牲者が出た相手だ。

亡くなった戦士たちに強い思い入れがあった人たちが、泣き崩れたりもした。

敵を討ったとしても亡くした相手は戻らないが、無念を払ったということが大切なのだ。

そして、俺たちとメルリルとを讃えて、宴を開いてくれるということになった。

腹が減りすぎたのか、若干涙目になっていたモンクと聖女がホッとした顔になったのは言うまでもないだろう。

途中、見つけたベリーなどを食わせてやったのだが、まあ足りないよな。

宴の前に、まずはさっぱりと疲れをとろうということで、湯浴み^{ゆあび}をさせてもらうこととなった。

この村には温泉があり、誰もがいつでも入ることが出来るようになっていた。

貸してもらった湯浴み着に着替えて、全員で湯に浸かると、ため息のような長い声が出た。

「少し匂いがあるし、濁っているけど、なんだか気持ちがいいお湯ですね」

「このお湯には薬効があつて、肌荒れや炎症なんかがすぐに治るし、打撲^{たぶく}とかにも効果があるのです」

モンクの感想にメルリルが説明をする。

「昨日から暑かったり寒かったり、暖かかったり、体もさぞびっくりしているだろうな」

勇者がクンクンとお湯の匂いを嗅いで言った。やめろ、動物のようだよ。

「本当に。修行と思えばいいのかもしれない」

そんな勇者に聖女が律儀に答える。

剣聖は、少し深いところで頭だけを縁に置いて、目を閉じて静かにじっとしていた。

温泉を一番楽しんでいるのは彼なのかもしれない。

「お前も入るのか？」

フォルテが肩に下りて来て、じっとお湯を眺めている。

名付けのときにしゃべって以来、話しかけて来たり返事をしたりすることはなかった。あのときだけの特別なことなのか、そうではないのかはまだ判断が出来ない。

ただ、こいつはどうも俺に触れていないと落ち着かないようで、俺から離れてお湯を楽しんだりしなかった。

そこで、両手でお湯を掬って誘ってみる。

フォルテはくちばしでお湯をついばんで確かめた後、その湯の中に入り込み、水浴びを始めた。体ははみ出しているが満足そうだ。やはり竜の盟約だけあって、綺麗好きなのだろう。

「そうやって見ると、ただの綺麗な鳥のようですね。とても可愛いです」

メルリルが寄って来て、微笑んだ。

「まったくだな。誰よりも俺が一番こいつの正体が信じられないよ」

「あはは。……フォルテさん、私を癒やしてくれてありがとうございます」

メルリルがお礼を言うと、フォルテは一瞬だけそっちを向いたが、すぐに水浴び、いや湯浴びを再開した。

そんなにお湯が気に入ったのか。

湯を浴びたフォルテの羽毛は、少しだけ濡れたが、すぐに元のふんわりとした状態に戻り、深い青色を浮かび上がらせる。

触れるととてもやわらかく、ドラゴンから生み出されたモノという感じがしない。

恥ずかしながら、綺麗なモノに心惹かれるところがある俺は、すでにこのフォルテに愛着を覚えつつあった。高い木の梢でさえずる鮮やかで可愛い鳥と心置きなく戯れることは、子どもの頃の夢の一つでもあったのだ。

お湯から出ると、村の広場にはすっかり宴会の準備が出来上がっていた。

丸々とした巨大な山豚らしきものが丸焼きにされ、人が二、三人は入れそうな大きな鍋が火に掛けられている。

新鮮な果物、美しく飾られた料理。

大きな一枚板に盛られたさまざまな食物は、森人のセンスの良さを表しているようだ。

勇者一行と俺は、ふかふかの敷物の上に座らされた。そして見目麗しい森人の女人たちや、すらりとして老いを感じさせない森人の男たちに、代わる代わるお礼を言われ、酒を注がれ、肉を配られる。

勇者たちは、言葉はわからないながらも、礼を言われているのは理解できるのだろう。それぞれにこやかに対応していた。

まあ勇者は知らない相手に対するいつもの無表情だったが、それでも何かしてもらうことに礼は

言っているようだ。

一方で、メルリルは、俺たちから少し離れた場所にいた。

大勢の人に囲まれ、涙ながらに笑顔を交わしている。

子どもたちがメルリルに抱きつき、何か駄々をこねているのが見えた。

「……笑顔よりも、泣いている人のほうが多いのは、どういふことなんだろうな」

決して陰鬱な雰囲気ではない。

それどころか、メルリルを囲む人々からは、温かく確かな強い絆きずなが感じられる。

それでも、俺は泣きながらメルリルにすがる小さな子どもの姿に、ひどく心が騒ぐのを止められなかった。

結局、酒の入った宴の後に話し合いは無理ということで、その夜は全員早々に寝た。

最初酒は遠慮しようとしたのだが、森人の酒があまりにもうますぎたのだ。蜂蜜酒はちみつしゅなどは子どもたちも水代わりにぐいぐい飲んでいたし、全体的に口当たりが良かった。

だが、結局のところ酒は酒だったということだ。

「お前もずいぶん飲んで食ったよな」

頭上のフォルテにそう言ったが、垂れている尾っぽは微動だにしない。寝ているのやらそうでないのやら。

ただ、宴の席でフォルテについても少しわかったことがある。

こいつは果物や野菜、味付けの薄い料理が好きだということ。酒に目がないこと。

つまり好みがあるのだ。

「生きているんだよ……な？」

頭上に手をやると、その手にやわらかな感触がすり寄って来る。

あまり難しく考える必要はないのかもしれない。どうせ、依頼が終わるまでのことだ。そう割り切ることで俺も気が楽になる。

だが、短い間とは言え、共に生きる存在に対して、無関心で過ごせるはずもない。

俺は軽く息を吐くと、まだ暗い部屋を抜け出して外に出てみることにした。すっかり染み付いた生活の癖で、夜明け前に目が覚めてしまったのだ。

勇者たちは飲酒の影響か、寝相が酷い。

あちこちに転がった体をひよいひよい避けつつ、外に出た。

外はやはり暗かったが、うっすらと明るさも感じられる。夜明けが近いのだ。

目に魔力を込めて村を見回した。

独特の、絡み合った木々によって形作られた家々は、よそ者である俺には奇異にも見えるが、美しさも感じられる。人が住む家というものは、その地域ごとに個性があるものだ。

それは土地の環境に合わせてより住みやすく考えて造られるからだ。

その違いが、世界の豊かさの一端のようにも思える。俺たち平野人は旅好きと言われるが、案外